

平成15年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 サワラ

学名 *Scomberomorus niphonius*

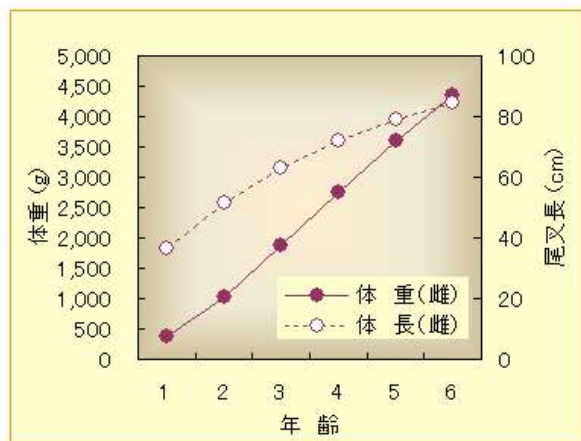
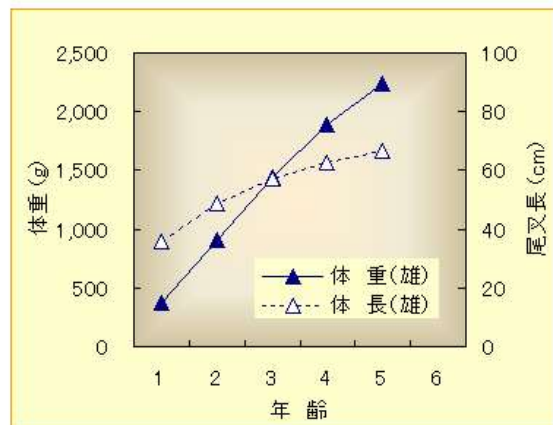
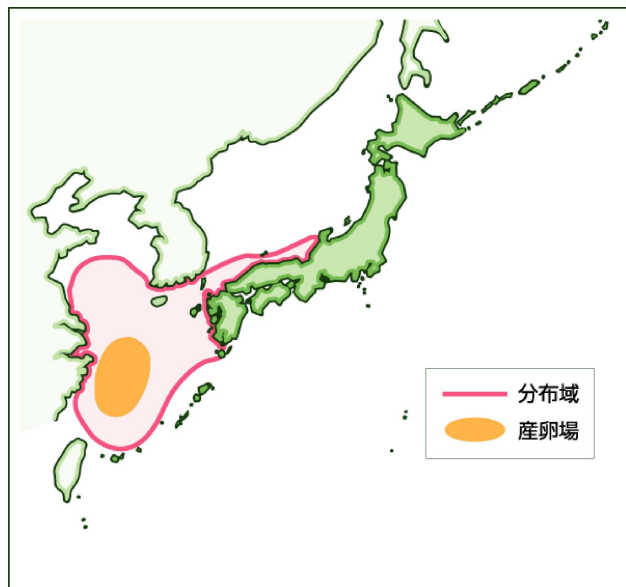
系群名 東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特徴

- 寿命： 約6歳
成熟開始年齢： 1歳(一部)、2歳(大部分)
産卵期・産卵場： 春季に産卵、産卵場は東シナ海の中央部から中国沿岸
索餌期・索餌場： 夏～秋季、黄海・渤海、日本海などが索餌場
食性： 稚魚期以降に魚食性
捕食者： 不明

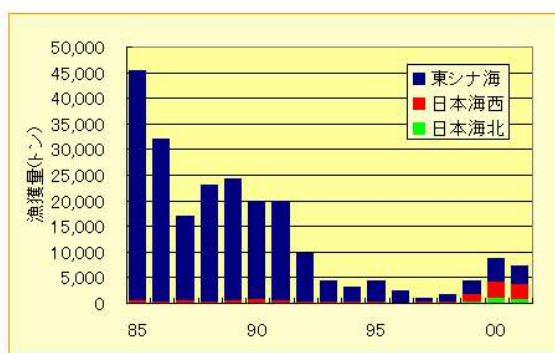
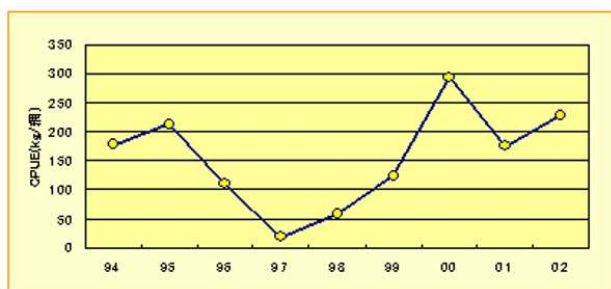


漁業の特徴

本資源は大中型まき網、中型まき網および定置網などにより漁獲される。一部にはヒラサワラやカマスサワラが混獲されるものの、大半はサワラである。本資源の漁獲量のうち約半分を占める大中型まき網は済州島西沖から東シナ海中央部および対馬周辺で漁獲している。近年、中国漁船によるサワラの漁獲量が増加しており、中国漁船が漁獲したものの一部が日本へ輸出されている。

漁獲の動向

サワラは高級魚であるので、漁獲量は少ないとはいえ、生産額は大きいため、大中型まき網の主要漁獲対象魚種となっている。1984年以降のデータをみると、1985年に大中型まき網により約43,000トンの漁獲量があったものの、その後減少し続け、1997年には約1,000トンとなった。1998年以降当才魚を主体にして漁獲量が増加し始め2000年には8,700トン(日本海と東シナ海)となったものの、2001年には再び減少し7,200トンとなった。2002年にはさらに減少したとみられる。本資源は、日本より韓国・中国が多く漁獲している。

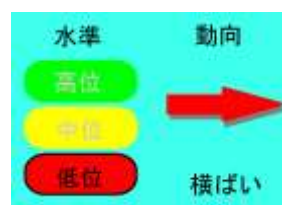


資源評価法

中国と韓国による漁獲量が、日本の漁獲量よりもはるかに多いため、日本の漁獲データだけを用いてコホート解析などにより資源量を推定するのは適当ではない。現在のところ、沖合で操業する大中型まき網の漁獲量とCPUE(漁獲量÷有効努力量)で資源水準と動向を判断している。

資源状態

日本の漁獲量の推移をみると、1980年代と比較して低水準にある。1994年以降の大中型まき網のCPUEの経年変化をみると、1997年まで減少し続けた後、1998年から2000年までは増加傾向にあったが、2001年以降はやや減少した。したがって、資源は低位、動向は横這いと判断した。



管理方策

東シナ海において、日本の漁獲量は、中国・韓国に比べて小さいため、資源に与える影響は相対的に小さいと考えられる。ただし、資源が低水準にあるなかで、日本が積極的に資源管理をする意義はある。資源水準を増大させるには、未成魚を保護し産卵親魚を増加させることが望ましい。ただし、その前に3国による資源評価を行なうことが必要で

あろう。ここでは、2001年と2002年のCPUEの変化率を2002年の漁獲量に乗じることにより、ABClimitを求めた。ABClimitは0.8×ABClimitとした。

	2004年ABC	管理基準	F 値	漁獲割合
A B C limit	52百トン	0.95Ccurrent	-	-
A B C target	42百トン	0.8ABClimit	-	-

資源評価のまとめ

- 日本の漁獲量に比べ、中国と韓国の漁獲量が多いため、日本の漁獲データだけでは東シナ海のサワラの資源量の評価は困難
- 1998～2000年にサワラの漁獲量および大中型まき網のCPUEは増加したが、2001年以降は減少
- 日本が漁獲しているサワラの大半は0、1歳魚

資源管理方策のまとめ

- 中国と韓国のデータを合わせて、東シナ海全体の資源評価を行う必要がある
- 未成魚主体に漁獲しているので、漁獲開始年齢を上げ産卵親魚を増加させることが資源増大に有効である

資源評価は毎年更新されます。